

新入生対象 TOEIC Bridge IP テストと意識調査の分析

—— 佛教大学における英語教育について (2) ——

松 本 真 治

1. はじめに

佛教大学では、平成16年度実施のカリキュラム改革にともない、全学共通科目の必修外国語「英語」に習熟度別クラス編成を導入することになった。クラス編成の基礎資料としては、筆者もその一員である教授法開発室の実施する新入生対象の英語基礎力調査の結果を用いた。本論では、この英語基礎力調査で使用された TOEIC Bridge IP テストの結果と、同時に行われた英語に対する意識調査を分析し、新入生の英語力ならびにニーズを分析することにより、今後の佛教大学における英語プログラムのあり方を検討する。

2. 英語カリキュラム改革

平成16年度実施のカリキュラム改革にともない、佛教大学はこれまでの3学部（文学部・教育学部・社会学部）12学科体制から、社会福祉学部を加えた4学部8学科体制へと再編された。同時に、外国語の履修にも大幅な改革が行われた。これまでは全学部全学科とも「英語」「中国語」「ハングル」「ドイツ語」「フランス語」より1語種6単位選択必修であり、学部・学科・学年・語学力を問わず、学生は自由に語学クラスを受講（抽選制）するという形態であった。旧カリキュラムでは、学生はそれぞれの興味・関心に合った授業を受講できるという利点があったが、その自由なシステムの裏返しとして、受講生間のレベル格差、出席不良・最終試験未受験者の増加という問題が生じることにな

った。また、根本的な問題として、授業を通して受講生の語学力が伸びているのか、ということも考えざるをえなくなってきた。これらの問題を踏まえて、新カリキュラムの必修外国語としては、基本的に「英語」「中国語」「朝鮮語」より1語種を8単位履修するということに改められた(表1)。

表1. 必修外国語(8単位)

文学部	人文学科	「英語」「中国語」「朝鮮語」より1語種選択必修
	中国学科	「中国語」必修
	英米学科	「英語」必修
教育学部	教育学科	「英語」必修
	臨床心理学科	「英語」必修
社会学部	現代社会学科	「英語」必修
	公共政策学科	「英語」必修
社会福祉学部	社会福祉学科	「英語」必修

同じ必修外国語系列であっても、ほとんどの新入生にとっては初修外国語である「中国語」「朝鮮語」の2つと、中・高6年間の学習経験のある「英語」は必然的にそれぞれの運営方針が異なる。必修外国語「英語」は次の5つの基本方針にもとづいて運営されている。

- 1) 習熟度別クラス編成—— TOEIC Bridge テストの活用
- 2) コミュニケーション能力養成中心
- 3) 1回生時に集中的に学習
- 4) 1回生時にリーディングとリスニングの基礎を徹底
- 5) 到達目標は2回生終了時点で TOEIC 500点 (TOEIC 対策が中心ではない)

また、履修形態としては次のようになっている(表2)。

表 2. 必修外国語「英語」履修形態

1 回生春学期	Basic Reading 1	各 1 単位
	Basic Listening 1	
	Basic Communication 1	
1 回生秋学期	Basic Reading 2	
	Basic Listening 2	
	Basic Communication 2	
2 回生春学期	Intermediate Communication 1	
2 回生秋学期	Intermediate Communication 2	

必修外国語としての「英語」に加えて、2 回生以上を対象とした選択系「英語」科目や（表 3）、原則的に 2 回生以上で TOEIC 500 点以上のレベルの学生を対象にした、高度な英語力の養成を行う発展系「英語」科目（Extended Seminars）も開講されている（表 4）。

表 3. 選択系「英語」科目

Lower-Intermediate Conversation	各 1 単位
Intermediate Conversation	
Internet	
Business	
Skill-building (TOEIC 500 / 600)	
Intermediate Reading	
Intermediate Listening	
Intensive Overseas Program	
Intensive Program in Japan	

表 4. 発展系「英語」科目 Extended Seminars

Communication Seminar	各 2 単位
Lecture	
Intensive Overseas Program	
Intensive Program in Japan	

3. TOEIC Bridge IP テストの結果

3.1 TOEIC Bridge IP テスト実施概要

3.1.1. TOEIC Bridge テストとは

TOEIC Bridge テストとは、初・中級レベルの英語コミュニケーション能力測定のために開発されたテストであり、TOEIC テストよりも平易で、日常的な身近な内容が出題されている。分量的にも TOEIC テストの半分で、リスニング（25分・50問）とリーディング（35分・50問）の合計1時間・100問で行われ、スコアは2点刻みで、リスニング、リーディングとも各10点～90点、トータル20点～180点という形で表される。なお、TOEIC Bridge テストには、5分野3段階評価のサブ・スコアというものがつけられる。

TOEIC Bridge の実施・運営を行っている財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会によれば、TOEIC スコア450点以下が TOEIC Bridge 受験の、そして TOEIC Bridge スコアが160点に達した場合を TOEIC 受験の目安として提示している。しかしながら、TOEIC 運営委員会は、TOEIC スコア450点 と TOEIC Bridge スコア160 点には相関関係はないとしている。

佛教大学では平成14年度より、就職部によって TOEIC IP テストが行われている。平成14年度のスコアから推定して、学年を問わず、佛教大学生の英語力は TOEIC テストで350点前後であろうと思われる（松本 2003）。したがって、新入生の英語基礎力を調査するためには、TOEIC テストよりも、TOEIC Bridge テストを利用するほうが相応しいと判断した。

3.1.2. 実施データ

英語基礎力調査は以下のように実施された。

- 実施日：平成16年4月6日（火）
- 対象者：1回生（文学部・教育学部・社会学部・社会福祉学部）
- 受験者数：1469人

なお、9人の受験者が遅刻により、リーディング・セクションのみの受験となったため、この9人は受験者総数からは除外していることをつけ加えておく。

3.1.3. 教室環境の差

今回の英語基礎力調査は、新入生全員を対象にしたものであり、原則的に、同一学科の学生は同じ教室で受験させることにした。したがって、同一学科内での受験環境によるスコアの差異はほぼないと考えてよい。しかしながら、音響設備の整っていない教室で受験しなければならない学科もあり、そのため、他学科の受験者と比較してリスニングにおいて不利な状況にあったと考えられる。筆者は当日、リスニング試験実施時に全実施教室を回り、音響の具合を実際に確認してみたが、とりわけ社会福祉学部の教室は受験者にとってテープ音声聞き取りにくい環境となっていた。座席の位置にかかわらず全体的に音量が小さく、しかもその音声がはっきりと聞こえてくるものではなかった。実際に、その影響は数値として社会福祉学部のリスニングのスコアに反映されているようである。

別の2学科が受験した教室も、テープ音声がやや不明瞭であったり、座席の位置によっては聞きにくいというようなこともあったが、社会福祉学部のように、スコア的に大勢に影響を及ぼしているということはないようである。それ以外の学科が使用した教室は、ほぼ同じ程度に聞き取りやすい環境となっていたと言ってよい。

3.2 新入生の英語力

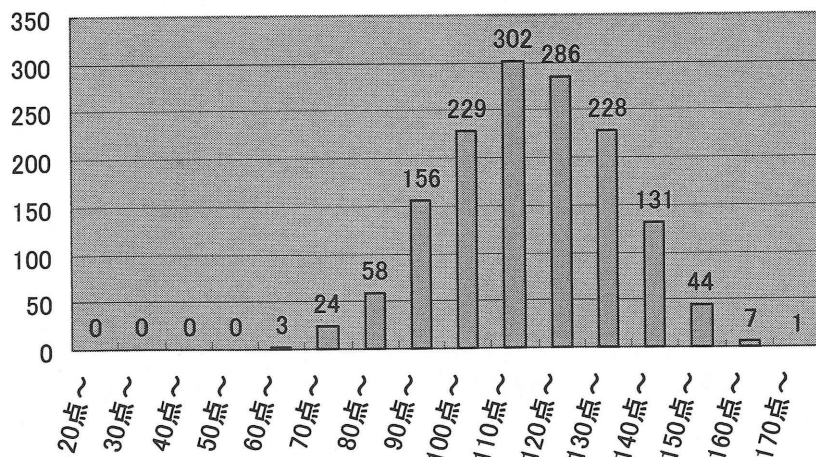
3.2.1. トータル・スコア

新入生の英語力であるが、表5のような結果となった。また、スコアの分布に関しては図1のとおりである。

表5. 受験者全体のスコア (1469人)

	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	117.6点	56.8点	60.8点
標準偏差	18.2点	9.8点	10.7点
最高点	170点	86点	88点
最低点	62点	28点	30点

図1. 新入生全体のスコアの分布 (1469人)



トータル・スコアの平均117.6点をどのように考えるかであるが、TOEICテストの受験経験者が、1469人のうちわずかに17人であるということから、受験者がテスト形式に不慣れなために、普段の実力を出し切れていないということも考えられる。また、前述のように、社会福祉学部の学生の教室環境が音響施設の点で不利な状況にあったことも斟酌しなければならない。しかしながら、総体的には TOEIC テスト受験の目安となる160点を下回り、160点以上のス

コアをマークした学生はわずか8名であったことや、全体のスコアの分布から判断すると、新入生の英語基礎力の測定方法として TOEIC Bridge テストが相応しい尺度であったと言える。と同時に、大多数の学生にとっては、大学卒業新入社員の平均点にあたる TOEIC スコア450点や、新カリキュラム「英語」の到達目標である TOEIC スコア500点のレベルに達することが当面の課題となろうし、それはまた英語教師に課せられた急務でもあろう。佛教大学生にはリスニング、リーディングのいずれにおいても、まだまだ学習すべき余地が残されている。

3.2.2. リスニングとリーディング

一見すると、リスニングのスコア平均が56.8点、リーディングのスコア平均が60.8点であり、全体的にややリスニングの方が低いように思われる。しかし、リスニング・セクションで不利な環境にあった社会福祉学部を除いた文学部、教育学部、社会学部の3学部だけのトータル・スコアの平均は120.1点であり、リスニング、リーディングの平均点はそれぞれ59.3点、60.8点となり、リスニングとリーディングの平均点格差は縮まる（表6）。社会福祉学部単独のスコアを見ると、リスニング平均点が47.0点というように、他の3学部と比べて著しく低い成績となっている（表7）。

表6. 文学部・教育学部・社会学部のスコア（1167人）

	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	120.1点	59.3点	60.8点
標準偏差	18.4点	9.0点	11.0点

表7. 社会福祉学部のスコア（302人）

	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	107.6点	47.0点	60.6点
標準偏差	12.9点	5.9点	9.4点

リスニングとリーディングの相関関係であるが、受験者全体では〈やや弱い相関関係〉、文学部・教育学部・社会学部は〈やや強い相関関係〉、社会福祉学部は〈非常に弱い相関関係＝関係なし〉となる（表8）。

表8. リスニングとリーディングの相関係数

受験者全体	0.576
文学部・教育学部・社会学部	0.706
社会福祉学部	0.383

社会福祉学部の学生は他学部の学生と比べて、元々リスニングとリーディングの能力格差が大きかったというような仮定もありうるが、むしろ教室環境のハンディが原因であったと考える方が妥当であろう。社会福祉学部の入試選抜方法が他学部の方法と大きく異なっているということはない。他学部と同じ条件であれば、社会福祉学部のリスニングのスコアがもっと高くなっていたと想定することは十分可能であろう。

3.2.3. サブ・スコア

サブ・スコアとは、5つのカテゴリーに関して、それぞれの分野でどの程度できたかを1～3の3段階評価により評価し、数値が高いほど評価が高いということになる。TOEIC Bridge テストのホームページから、サブ・スコアの解説を引用しておく（表9）。

表9. TOEIC Bridge テストのサブ・スコア

カテゴリー	内 容
Functions (言葉のはたらき)	どのような目的と意図（例：何かの申し出・要求・時間を伝える・指示・情報収集など）で英語が使用されているのかを理解できる。
Listening Strategies (聞く技術)	英語を聞いて、必要な情報を聞き取る、話の要旨をつかむ、内容を推測する、アクセント・発音・時制などを正しく聞き分けることができる。

Reading Strategies (読む技術)	英語を読んで、必要な情報を読み取る、さっと読んで意味をつかむ、話の要旨を見極める、内容を推測する、文章内の構造が理解できる。
Vocabulary (語彙)	日常生活、嗜好、趣味、娯楽、旅行、健康、簡単な商取引などに関する単語や語句、及び文脈における意味を把握できる。
Grammar (文法)	文法を理解し、用法も把握している

受験者のサブ・スコアおよび分布は以下のとおりである（表10、11）。前述のように社会福祉学部のリスニング・データは不完全なものであるかもしれないので、他学部との比較をしておく（表12、13）。

表10. 受験者全体のサブ・スコア（1469人）

	Functions	Listening Strategies	Reading Strategies	Vocabulary	Grammar
平 均	1.43	1.46	1.70	1.85	1.89
標準偏差	0.54	0.59	0.64	0.64	0.63

表11. 受験者全体のサブ・スコアの分布（1469人）

	Functions	Listening Strategies	Reading Strategies	Vocabulary	Grammar
評価 1	864人 (58.8%)	863人 (58.7%)	591人 (40.2%)	428人 (29.1%)	389人 (26.5%)
評価 2	574人 (39.1%)	533人 (36.3%)	728人 (49.6%)	830人 (56.5%)	859人 (58.5%)
評価 3	31人 (2.1%)	73人 (5.0%)	150人 (10.2%)	211人 (14.4%)	221人 (15.0%)

表12. 文学部・教育学部・社会学部のサブ・スコア (1167人)

	Functions	Listening Strategies	Reading Strategies	Vocabulary	Grammar
平 均	1.54	1.57	1.73	1.84	1.88
標準偏差	0.55	0.61	0.65	0.65	0.64

表13. 社会福祉学部 of サブ・スコア (302人)

	Functions	Listening Strategies	Reading Strategies	Vocabulary	Grammar
平 均	1.02	1.03	1.58	1.89	1.92
標準偏差	0.15	0.18	0.59	0.63	0.62

サブ・スコアを見ると、総体的に Functions と Listening Strategies を苦手としている傾向が見られる。社会福祉学部単独のサブ・スコアを見ると、この2つのカテゴリーの評価が落ち込んでおり、そこにはリスニングのスコアの低さが影響している。残りの3つのカテゴリー、すなわち Reading Strategies、Vocabulary、Grammar の評価を比べると、Reading Strategies を苦手とする学生がやや多いようである。

サブ・スコアの結果から総合的に言えることは、リスニング、リーディングともに、言語の知識や基本的な能力は備わっているのだが、実際に言語を運用するという点で弱いということであろう。「英語の音声聞き分けができる」、「語彙・文法を知っている」だけではなく、その知識・能力をいかに実践の場で発揮できるのかということが、今後の学習のポイントの一つとなろう。教師は、学生の英語の基礎力をさらに充実させるとともに、実際に英語を使用する場を出来る限り数多く与え、英語の実践的運用力の養成には特に力を注ぐべきであろう。

3.3 TOEIC Bridge テストと英検の相関関係

参考までに、今回の英語基礎力調査でのデータを利用して、TOEIC Bridge テストと英検の相関関係を見てみる。必ずしも英検取得級と英語力は

イコールではなく、英検 2 級の実力がありながらも未受験ということも考えられよう。しかしながら、クロス集計により、漠然としたイメージを得ることができるだろう (表14)。

表14. 英検取得級と TOEIC Bridge テストのスコア

英検取得級	人数	平均点	標準偏差	最高点	最低点
2 級	29人	142.9点	14.4点	164点	110点
準 2 級	190人	127.9点	14.6点	170点	94点
3 級	283人	120.3点	15.4点	162点	62点
4 級	109人	114.0点	17.8点	152点	66点
5 級	38人	110.5点	18.3点	154点	76点

4. 英語に対する意識調査

4.1. アンケート結果

表15.

I 「英語は得意ですか」	人 数		平均点 (標準偏差)
①得意である	14人	1.0%	137点 (23.3)
②どちらかといえば得意である	202人	13.8%	131.0点 (14.9)
③あまり得意ではない	578人	39.3%	122.0点 (15.4)
④苦手である	625人	42.5%	109.6点 (16.7)
⑤回答なし	50人	3.4%	—

表16.

II 「あなたは英語でコミュニケーションができますか」	人 数		平均点 (標準偏差)
①あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる	3人	0.2%	93.3点 (8.2)
②日常生活レベルである程度のコミュニケーションができる	51人	3.5%	131.5点 (19.8)
③片言で話せる程度	427人	29.1%	124.1点 (16.4)
④挨拶などの簡単な表現を知っている程度	775人	52.8%	115.7点 (17.0)
⑤全く話せない	165人	11.2%	108.4点 (17.5)
⑥回答なし	48人	3.3%	—

表17.

III 「あなたは英語力を伸ばしたいですか」	人 数		平均点 (標準偏差)
①もっと伸ばしたい	444人	30.2%	123.7点 (17.6)
②伸ばしたい	361人	24.6%	118.6点 (17.0)
③できるなら伸ばしたい	554人	37.7%	114.1点 (17.4)
④その必要はない	19人	1.3%	106.3点 (18.4)
⑤満足ではないが伸ばしたいとも思わない	43人	2.9%	107.0点 (15.4)
⑥回答なし	48人	3.3%	—

表18.

IV「自分が目標とする英語コミュニケーション能力はどの程度ですか」	人 数		平均点 (標準偏差)
①あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる	256人	17.4%	122.6点 (18.9)
②仕事に支障のない程度にコミュニケーションができる	290人	19.7%	120.5点 (16.0)
③日常生活に困らないくらいコミュニケーションができる	725人	49.4%	117.4点 (17.6)
④片言で話せる程度	120人	8.2%	107.5点 (17.1)
⑤話せなくても良い	30人	2.0%	107.5点 (16.5)
⑥回答なし	48人	3.3%	—

表19.

V「英語は必要だと思いますか」	人 数		平均点 (標準偏差)
①とても必要だ	392人	26.7%	120.9点 (18.0)
②必要だ	706人	48.1%	118.4点 (17.3)
③やや必要だ	249人	17.0%	114.4点 (18.2)
④あまり必要でない	56人	3.8%	109.4点 (16.3)
⑤必要でない	10人	0.7%	99.4点 (16.4)
⑥全く必要でない	7人	0.5%	115点 (20.7)
⑦回答なし	49人	3.3%	—

表20.

VI「英語は何に役立つと思いますか」（1つ選択）	人 数	
①学問	67人	4.6%
②進学	23人	1.6%
③留学	79人	5.4%
④就職	258人	17.6%
⑤公務員、教員採用試験	97人	6.6%
⑥国際交流、貢献	800人	54.5%
⑦その他	89人	6.1%
⑧役立つとは思わない	4人	0.3%
⑨回答なし	52人	3.5%

4.2. アンケート分析

4.2.1. 苦手意識

アンケート項目Ⅰ「英語は得意ですか」（表15）からわかるように、受験者の80%以上が英語に対して苦手意識を持っているようであり、ここに佛教大学における英語教育の抱える問題の一つが浮かび上がる。いかにして学生の持つ英語に対する苦手意識を払拭させるかということが重要な課題であろう。TOEIC Bridge IP テストのスコアと「英語に対する得意／苦手意識」には非常に弱い相関関係しか見られない（相関係数0.449）。したがって、単にテストのスコアを伸ばすことだけではなく、それぞれの学生のニーズを満たすような英語力を身につけさせることが問題解決の糸口となろう。ただ、アンケート項目Ⅳ（表18）に見られるように、相当高い到達目標を掲げている学生もあり、そのような学生の要求に応えることは相当難しい。

4.2.2. イメージと実力

アンケート項目Ⅱ「あなたは英語でコミュニケーションができますか」（表16）の選択肢①は TOEIC テストのレベルB（TOEIC 730-860点）に、選択肢②はレベルC（TOEIC 470-730点）にそれぞれ相当するものとして設定し

たのだが、受験者には具体的なイメージが浮かばなかったのかもしれない。とりわけ選択肢①に関しては、回答者のスコア平均点を考えるとデータの信憑性がない。選択肢②に関しては一定の信憑性はあるにしても、意識と実力、もしくはイメージと現実の乖離を完全に否定することはできない。反対に、およそ50%を占める選択肢④であるが、受験者が自分の英語力を過小評価している感も拭えない。

アンケート項目Ⅰと項目Ⅱを照らし合わせても、「英語が得意」という意識と「コミュニケーションができる」という意識の間に必ずしも相関関係は見られない（相関係数0.401）。

4.2.3. 学習意欲

アンケート項目Ⅲ「あなたは英語力を伸ばしたいですか」（表17）を見ると、積極的に英語力を伸ばしたいと考えている学生が50%を超えており、このような意欲的な学生の期待に教師は十分応えなければならない。また、積極的ではないにしろ、英語力の進捗を望む学生が40%弱存在している。このような学生をいかにして、英語学習に対して動機づけさせるかも英語プログラムの重要な課題である。全体的な英語力の底上げを考えるならば、この層の学生の指導が鍵となる。

この学習意欲と結びついているのは、アンケート項目Ⅰで見た「英語に対する得意意識」ではなく、むしろアンケート項目Ⅴの「英語は必要だと思いますか」（表19）である。アンケート項目Ⅴによれば、90%の学生が、何らかの形で英語の必要性を感じていることがうかがえる。この二つの意識には、やや弱い相関関係が見られ（相関係数0.583）、学習における動機づけの重要性をあらためて認識させられるものである。

4.2.4. 到達目標

アンケート項目Ⅳ「自分が目標とする英語コミュニケーション能力はどの程度ですか」（表18）も、項目Ⅱと同様に、TOEIC レベルを意識したものである。選択肢①、②を目指す意欲的な学生が40%弱存在し、50%弱の学生が選

択肢③を目標としている。選択肢③は TOEIC テストではレベルC、TOEIC 470点以上の能力ということになり、学生のニーズと TOEIC 500点という教
学目標が合致していることが理解されよう。

4.2.5. 内的な動機づけ

TOEIC Bridge IP テストを利用した独自アンケートでは、回答は1つに限られており、したがってアンケート項目VI「英語は何に役立つと思いますか」(表20)を複数回答可という形にできなかったのであるが、逆に興味深い結果を得ることできた。このアンケートでは、半数の学生が英語は「国際交流、貢献」に役立つと考えているようである。世間一般には、「英語は就職に役立つ」という風潮があるようだが、新入生ということもあって、就職と英語の結びつきが具体的なイメージとして捉えられていないのかもしれない。学年が上がるにつれて、その意識も変化するということは多分に考えられる。しかしながら、新入生に対しては、単なる就職のためといった外的な動機づけ (extrinsic motivation) の観点から英語を学習させるのではなく、「国際交流、貢献」という内的な動機づけ (intrinsic motivation) という観点から学習させることの有効性も見出すことができる。

5. おわりに

TOEIC Bridge IP テストの実施により、100%とは言わないにしろ、ほぼ新入生全体の英語力と英語に対する意識を知ることができた。次の段階としては、同じ1回生全員を対象として、学年末に再度 TOEIC Bridge IP テストを実施することにより、学生の英語力の進捗度を客観的に測定する。また同時に、英語に対する意識変化の追跡調査も行う。この作業を繰り返しながらデータを収集し、必修外国語「英語」プログラムの検証にフィードバックさせることによって、より効果的なプログラムの構築の実現を期待したい。

References

松本真治 (2003) 「佛教大学における英語教育について—— TOEIC IP テストとアンケート結果の分析——」『英文学論集』第12号 佛教大学英文学会

TOEIC Bridge ホームページ <http://www.toEIC.or.jp/bridge/>

TOEIC 運営委員会 (2000) 『TOEIC 公式ガイド&問題集』

- * 本稿の英語カリキュラム改革に関する部分は、関西英語英米文学会第48回例会（平成16年7月24日 於佛教大学）でのシンポジウム「英語教育の現状と展望」において口頭発表したものである。また、TOEIC Bridge IP テスト結果の分析については、佛教大学『教授法開発室だより』第12号（平成16年11月）に掲載したものに加筆・修正を施したものである。